

## はじめに

中熊秀喜

輸血・血液疾患治療部から血液内科学講座へ

早いものである。2003年6月の和歌山県立医科大学着任以来10年目に入った。教授職は十年と考えていたので重みを感じる。教室開設は和医大キャンパス移転にあわせた1999年4月1日となっている。その時の初代教授の大田喜一郎先生が約1年前に逝去されご冥福をお祈りしたい。着任6年後の2009年9月に教室開設十周年記念講演会を和歌山ビッグ愛において、ささやかながら開催した。この間、強い社会的責任感で教室を支えてくれた当時の同僚およびご支援を頂いた方々にあらためて深謝する。大学の組織は公的で永続的な存在であり、関係者全員の努力の賜物と思う。当初、血液内科は中央部門の輸血部と合体した輸血・血液疾患治療部として始まり、輸血・血液内科学として医学部大学院にも属していた。血液内科と5階西病棟を共有していた集学的治療・緩和ケア部（2009年10月に新組織の腫瘍センターへ配置）の部長を兼務した。私の赴任後の教室の10年を振り返り今後活かしたい。

1) 人材確保と教育：着任当時、患者約30名の入院診療、毎日2診態勢の外来診療、当直、教育（講義、臨床実習、試験等）を4人で分担し、信じ難い過酷な勤務であったと思う。耐え凌いだ当時の仲間には今でも感謝している。指導医確保と若手専門医育成に努めて医局員は10人を超え教官も5人になった。しかし、和歌山県では全国的に不足が叫ばれている小児科や産婦人科よりも血液内科の専門医が不足しており一層の努力が必要と自覚している。

2) 診療基盤の整備：病室を8階から5階へ集約して診療の効率化を進め、病床数も9から24へ増やしていただき、外来にも専任のナースを配置してもらえた。また労働環境整備として病棟医師勤務室とカンファレンス室の整備、稼働してなかった照射室を改築して備品倉庫やカンファレンス室へ転用した。チーム医療を促進するために信頼関係の構築を一層重視し、毎月定例の診療会議、紀三井寺の春の花見、歓送迎会、忘年会などを積極的に催した。近いうちに医局旅行を実現したい。

3) 研究活性化：外部資金獲得、実験室整備、大学院生育成、国内外からの講師招聘によるセミナー開催、学外との共同研究、国内研究班や国際会議（IPIG）メンバー参加、国内外への留学などを重視してきた。現在の研究生2人、大学院生5人、これまで米国留学2人。情報発信として英文原著11（IF >5、うち4つはIF >10）で、医局廊下に実例を掲示している。一方、10年目の今年、医学部教授会、山上裕機教授の委員会や大学の支援を頂き、医局、研究室が他教室並みになり、感謝すると同時に一層の責任を感じている。医局図書など備品の充実、教室の活動記録（年報）の毎年の発行、ホームページ開設（2006.6）も記録に残したい。

4) 組織改革：2012年4月、輸血・血液疾患治療部を発展的に改組して血液内科部門は医学部講座に配置され、中央部門は分離されて輸血部となった。輸血部教官1名も新しく認められた。業務の継続性を重視し血液内科教授と輸血部部長を私が兼務している。

5) 地域医療支援：和歌山ろうさい病院、海南市民病院（近く海南医療センターへ）、社会保険紀南総合病院、南和歌山医療センター、新宮市立医療センターの血液診療を支

援しており、さらに紀北地区支援も考慮したい。血液疾患患者サービス向上のために谷口病院、西岡病院、石本病院、和歌浦中央病院等の県内私的診療施設との連携も大切にしてきた。また、血液診療の卒後研修の機会を増やし、日赤和歌山医療センターなど県内の基幹病院および患者を共有する泉南のりんくう総合医療センターなどと共催している。

生まれ変わった血液内科学講座は、これからも多くの方々と助け合い、社会に役立つ堅実な歩みと発展をお約束します。これまでの皆様方のご支援に深く感謝致しますと共に、今後とも一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、これまで教室を支えて頂いた方々（敬称略）を記し感謝にかえたい。もれ等がありましたらご指摘下さい。教授：大田喜一郎（故人）；准教授：津田忠昭、岡本幸春、古賀 震、園木孝志、松岡 広、月山 淑（緩和ケア部）；講師：小島研介、花岡伸佳；助教：片山紀文、阪口 臨、采田志麻、畑中一生、田村志宣、島貫栄弥、西川彰則；大学院生また学内助教：浜 喜和、綿貫樹里、栗本美和、島貫栄弥、細井裕樹、村田祥吾、蒸野寿紀、栗山幸大；研究員または研究生（過去の同窓会誌より）：花野靖久、上江洲朝洋、辻本真人、泉 良治、谷本幸三、中山伊智郎、山路 功、奥 浩子、有田啓子、清水英二、坂口輝夫；医局秘書：畑中都世子、池宮理沙、大橋典子、東 恵美、小西彩花、花井宏実、濱口尚子；輸血部スタッフ：廣瀬哲人、畠中恒子、松浪美佐子、橋本安貴子、後垣内由里、神藤洋次、東 み幸、新垣千恵、澤井 愛、田中美恵子、中島志保、楠山摩希子、滝本真由美、堀端容子、清水勇輝、山本華帆里、杉山絵美、上田真弘、峯 梓。

## 教室現況

### (1) 教室員

医局	教授	中熊秀喜
	准教授	園木孝志
	講師	花岡伸佳
	助教	畑中一生
	助教	西川彰則 (4月1日～)
	助教	田村志宣 (～3月31日)
	研究生	島貫栄弥 (～3月31日)
	研究生	栗本美和
	研究生	<b>Kuan Jew Win</b> (10月9日～12月21日)
	学内助教	村田祥吾 (大学院生)
	学内助教	細井裕樹 (大学院生)
	学内助教	栗山幸大 (大学院生)
自治医大卒研修生		蒸野寿紀
	大学院生	綿貫樹里
	出向	なし
	研修医	長崎讓慈 (1月1日～2月29日)
		玉置雅治 (1月1日～3月31日)
		大岩健洋 (4月1日～7月31日)
		小畑裕史 (4月1日～6月30日)
		山下友佑 (4月1日～7月31日)
		岩本高典 (7月1日～8月31日)
		梅本秀俊 (7月1日～9月30日)
		田中 侑 (7月1日～9月30日)
		森本将矢 (10月1日～12月31日)
	秘書	花井宏実
		濱口尚子
輸血部	主査	松浪美佐子
	副主査	堀端容子
	副主査	中島志保
	医療技師	杉山絵美 (～3月31日)
	医療技師	上田真弘
	医療技師	峯 梓 (4月1日～)



# 臨床実習

平成 24 年 4 月～

## 血液内科

集合場所：入院病棟 5 階西 血内カンファレンスルーム (内線 2539)

総括の後、レポートを訂正し、血液内科医局の秘書机に一部提出すること。  
(訂正したレポートを提出しない場合、実習を履修しなかったと判断する。)

☆コピーは病棟で行わず医局で行うこと (内線 5453) ☆

日付	8	9	10:30	12:30	13	14	15	16	17～
/ ( / ) 月		第 1 週目 実習の 楽しみ方 (畑中助教)	症例学習			症例学習 【第 1 週目テーマ決定】(主治医)			17:00- 19:30 チャート カンファレンス
		第 2 週目 症例学習							
/ ( / ) 火	8:30-10:00 入院患者廻診 (中熊教授 /園木准教授)	症例学習	12:30- 薬の 説明 会 (血内医局)	症例学習	第 1 週目 15:00-17:00 血球形態を学ぶ (畑中助教)	第 2 週目 症例学習			
/ ( / ) 水		第 1 週目 症例学習	症例学習	第 1 週目 14:00-15:00 輸血部実習 (松浪主任)	症例学習	第 2 週目 症例学習			
		第 2 週目 外来・内科診察 (中熊教授)							
/ ( / ) 木	第 2 週目 8:00- 8:30 カンファレンス (CC/ MGH)	症例学習	症例学習	症例学習	第 1 週目 症例学習	第 2 週目 16:00- HIV 感染症を 把える (園木准教授)			
/ ( / ) 金		第 1 週目 外来・内科診察 (園木准教授)	症例学習	症例学習	第 1 週目 症例学習	第 2 週目 16:00- レポート発表会/レポート 提出 (花岡講師/西川助教) ※レポートは全員分と 教官用を準備			
		第 2 週目 症例学習							

教官から指摘を受けた箇所を訂正し、必ず医局に**本日中**に提出すること。

## 主な活動内容

### (1) 学術講演

#### 1) 国内講演会

中熊秀喜：第26回宮崎最新医学セミナー（ブリストールマイヤーズ社共催）、発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）の臨床と研究、5月15日、宮崎

中熊秀喜：NPO法人PNH倶楽部関西講演会&ディスカッション（Alexion社共催）、PNHの基礎と臨床、5月19日、大阪

中熊秀喜：徳洲会病院生涯教育講演会、血液診療の標準と話題、6月8日、鹿児島

中熊秀喜：第4回秋田輸血依存研究会（PTA研究会）（ノバルティスファーマ社共催）、特発性造血障害の分子病態と臨床、7月5日、秋田

中熊秀喜：第74回日本血液学会学術集会教育講演、PNHの病態と治療、10月20日、京都

中熊秀喜：第2回紀州血液塾（中外製薬共催）、白血病の分子標的療法、10月12日、和歌山

中熊秀喜：老年者造血器疾患研究会（大日本住友社共催）、発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）の病態、最新治療、今後の展開、11月8日、東京

中熊秀喜：Chugai Hematology Symposium（中外製薬共催）、多発性骨髄腫の病態、11月9日、和歌山

中熊秀喜：桜山学術セミナー（名市大腫瘍・免疫内科学、Alexion社共催）、発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）～最新の臨床と研究～、11月22日、愛知

#### 2) 海外または国際講演会

該当なし。

### (2) 学会および研究会

#### 1) 全国学会

栗山幸大、畑中一生、村田祥吾、細井裕樹、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「多発性骨髄腫（MM）に対する中等量メルファラン（100mg/m<sup>2</sup>；MEL100）による自家末梢血幹細胞移植（auto-PBSCT）の有用性に関する後方視的検討」第34回日本造血移植細胞学会、2月24日25日、大阪

村田祥吾、栗山幸大、細井裕樹、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「当院において移植関連血栓性微小血管障害（TA-TMA）を発症した14例の後方視的検討」第34回日本造血移植細胞学会、2月24日25日、大阪

田村志宣、畑中一生、栗山幸大、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、花岡伸佳、園木孝志、米谷昇、中熊秀喜、玉置俊治：「同種造血細胞移植を施行した多発性骨髄腫症例の後方視的検討」第34回日本造血移植細胞学会、2月24日25日、大阪

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症の病態と治療」第74回日本血液学会教育講演、10月19日20日21日、京都

Toshihiko Oki, Jiro Kitaura, Naoko Watanebe-Okochi, Kotaro Nishimura, Akie Maehara, Tomoyuki Uchida, Yukiko Komeno, Fumio Nakahara, : 「RasGRP1 and its roles in T-ALL」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

Kazuo Hatanaka, Takahiko Nakane, Masayuki Hino, Toshiharu Tamaki, Tohru Takada, Isao Yoshida, Toshihiro Fukushima, Youichi Tatsumi, Mitsune Tanimoto, Akio Urabe, Tohru Masaoka, Akihisa Kanamaru, Kazuo Tamura: 「Randomized controlled study of the efficacy of 3 antibiotics for the empiric therapy of FN patients」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

Kimikazu Yakushijin, Sigeo Fuji, Yasutaka Aoyama, Nobuhiko Uoshima, Yuri Kamitsuji, Hiroya Tamaki, Takahiko Nakane, Kazuo Hatanaka, Keiko Matsui, Noboru Yonetani, Hiroshi Matsuoka: 「A survey of vaccination after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation in Hanwa Area」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

Natuko Ikeda, Shinichiro Fujiwara, Akinori Nishikawa, Raine Takara, Mitsuhiro Yuasa, Miyuki Sugimoto, Ken Ohmine, Daisuke Koyama, Tomohiro Matsuyama, Masaki Mori, Tadashi Nagai, Keiya Ozawa, Kazuo Muroi: 「Intrathecal injection of high titer CMV immune globulin for CMV meningitis」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

Koichi Inoue, Miyuki Akitsu, Tohru Izumi, Yuji Kikuchi, Masaru Tanaka, Saburo Tsunoda, Keita Kirito, Kazuya Sato, Akinori Nishikawa, Tomohiro Matsuyama, Takahiro Nagashima, Toshihiko Sato, Susumu Katano, Yasuhiko Kano: 「Clinical significance of interim PET in the management of diffuse large B cell lymphoma」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

Shinobu Tamura, Kazuo Hatanaka, Koudai Kuriyama, Hiroki Hosoi, Syougo Murata, Nobuyosi Hanaoka, Takashi Sonoki, Hideki Nakakuma, Tetsuro Nishimoto, Toshiharu Tamaki: 「The safety and efficacy of MEL100 with auto-SCT in high-risk patients with non-Hodgkin's

lymphoma」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

Miwa Kurimoto, Hiroshi Matsuoka, Nobuyoshi Hanaoka, Shima Uneda, Toru Murayama, Takashi Sonoki, Hideki Nakakuma, : 「Pretreatment of leukemic cells with low-dose decitabine enhances the effect of gemtuzumab ozogamicin」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

Masaya Shimanuki, Takashi Sonoki, Jyuri Watanuki, Hiroki Hosoi, Koudai Kuriyama, Syogo Murata, Shinobu Tamura, Kazuo Hatanaka, Nobuyoshi Hanaoka, Hideki Nakakuma: 「Molecular cloning of IG  $\lambda$  rearrangements using long distance inverse-PCR(LDI-PCR)」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

花岡伸佳、村上良子、永田雅英、長倉祥一、米村雄士、園木孝志、木下タロウ、中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症における血管外溶血の病態生理学的意義」第74回日本血液学会、10月19日20日21日、京都

## 2) 地方学会

玉置雅治(初期研修医)、栗山幸大、村田祥吾、畑中一生、細井裕樹、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「非血縁者間同種骨髄移植施行後に発症した HHV-6 脳症に対し早期診断により良好な経過」第97回近畿血液学地方会、6月23日、大阪

細井裕樹、畑中一生、栗山幸大、村田祥吾、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「劇症型再生不良性貧血（SAA）に顆粒球輸注を併用して同種臍帯血移植を施行した一例」第97回近畿血液学地方会、6月23日、大阪

川本晋一郎、米谷 昇、田窪孝行、畑中一生、玉置俊治、今北正美：「大腸・肺重複癌に合併した自己免疫性溶血性貧血の一例」第97回近畿血液学地方会、6月23日、大阪

栗山幸大、田村志宣、村田祥吾、細井裕樹、西川彰則、花岡伸佳、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「高度の治療関連毒性を認めた HIV 感染関連リンパ腫の一例」第97回近畿血液学地方会、6月23日、大阪

畑中一生：「同種造血幹細胞移植の前処置の変遷」第97回近畿血液学地方会、6月23日、大阪

小畑裕史、花岡伸佳、栗山幸大、村田祥吾、細井裕樹、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「WT1 ペプチドワクチン療法中の再発に対して少量の抗癌剤で病状をコントロールできた一例」第98回近畿血液学地方学会、12月1日、京都

大岩健洋、西川彰則、田中 侑、蒸野寿紀、栗山幸大、村田祥吾、細井裕樹、花岡伸佳、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「R-CODOX-M/R-IVAC 療法にて良好な経過をたどった MYC 陽性 DLBCL の一例」第 98 回近畿血液地方学会、12 月 1 日、京都

### 3) その他 (研究会等)

中熊秀喜：日本PNH研究会・疫学部会 (Alexion 社共催)、日本独自調査項目について、1 月 14 日、大阪

中熊秀喜、畑中一生：西日本血液臨床研究グループ (W-JHGS) キックオフ会議 (ノバルテイス社共催)、2 月 9 日、福岡

栗山幸大、畑中一生、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「同種免疫効果(Graft-versus-WM effect)によって M 蛋白消失・維持している原発性マクログロブリン血症(WM)の一例」第 10 回和歌山造血細胞療法研究会 3 月 3 日、和歌山

池田悟子、細井裕樹、畑中一生、栗山幸大、村田祥吾、西川彰則、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜、田村志宣：「劇症型再生不良性貧血 (SAA) に顆粒球輸注を併用して同種臍帯血移植を施行した一例」第 80 回和歌山医学会総会、7 月 8 日、和歌山

村田祥吾、栗山幸大、細井裕樹、蒸野寿紀、西川彰則、花岡伸佳、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「当院における移植関連血栓性微小血管障害 (TA-TMA) の後方視的検討」第 24 回大阪造血細胞幹細胞疾患研究会、7 月 13 日、大阪

栗山幸大、畑中一生、細井裕樹、村田祥吾、蒸野寿紀、西川彰則、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「ベルケイド(Bortezomib)による寛解導入と中等量メルファラン(100 mg/m<sup>2</sup>, MEL100)による自家末梢血幹細胞移植(auto-PBSCT)」第 16 回阪和血液病カンファレンス、7 月 14 日、大阪

細井裕樹：「顆粒球輸注併用にて同種臍帯血移植を施行した劇症型再生不良性貧血の症例」：CBT MEETING in 和歌山、9 月 6 日、和歌山

西川彰則：「サリドマイド治療について」骨髓腫フォーラム in 和歌山、9 月 7 日、和歌山

園木孝志：「和歌山県のエイズの現状」HIV・エイズに関する研修会、12 月 8 日、和歌山

### 4) 海外または国際学会

該当なし。

### (3) 学術論文

#### 1) 和文原著

該当なし。

#### 2) 英文原著

Hanaoka N, Murakami Y, Nagata M, Nagakura S, Yonemura Y, Sonoki T, Kinoshita T, Nakakuma H: Persistently high quality of life conferred by coexisting congenital deficiency of terminal complement C9 in a paroxysmal nocturnal hemoglobinuria patient. *Blood* 119:3866-3868, 2012

Kazuo Hatanaka , Shigeo Fuji, Kazuhiro Ikegame , Ruri Kato , Atsushi Wake, Michihiro Hidaka , Toshiro Ito, Masami Inoue, Yoshihisa Nagatoshi, Akiyoshi Takami , Naokuni Uike, Hisashi Sakamaki, Hiromasa Yabe, Yasuo Morishima, Ritsuro Suzuki , Yoshiko Atsuta , Takahiro Fukuda: Low incidences of acute and chronic graft-versus-host disease after unrelated bone marrow transplantation with low-dose anti-T lymphocyte globulin. *Int J Hematol* 96:773-780, 2012

#### 3) 和文総説

花岡伸佳、中熊秀喜：PNHに対する抗体療法。血液内科 64(5):566-575, 2012

中熊秀喜：自己免疫性骨髄不全症候群-自己抗原の探索。日本内科学会雑誌 101(7):2010-2015, 2012

中熊秀喜：発作性夜間ヘモグロビン尿症の病態と治療。臨床血液 53(10):1566-1527, 2012

#### 4) 英文総説

該当なし。

### (4) 著書(単行本、シリーズもの含む)

中熊秀喜：溶血性貧血。日本輸血・細胞治療学会 認定医制度指定カリキュラム。pp184-186、杏林舎、2012

### (5) その他の印刷物(研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など)

該当なし。

### (6) 受賞等

該当なし。

### (7) 研究費、助成金

中熊秀喜：平成24年度厚生労働科学研究費補助金事業 特発性造血障害に関する調査研究班 溶血性貧血領域研究協力(班長 黒川峰夫 東京大学教授)

花岡伸佳：平成24年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）（代表）、「特発性造血障害におけるNKG2D免疫の臨床的意義の確立」

花岡伸佳：平成24年度（第31回）血液医学分野 一般研究助成（代表）、先進医薬研究振興財団、「NKG2D免疫を利用した血液癌の免疫療法の開発に関する基礎的研究」

#### (8) 支援研究会など

和歌山血液疾患セミナー（ファイザー社主催）：移植後早期感染管理のガイドラインについて、福田隆浩（国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科副科長）、3月2日、和歌山

第10回和歌山造血細胞療法研究会（アステラス社共催）、骨髄移植から24年、元気に生きています。医療スタッフの方々への感謝を込めて、大谷貴子（全国骨髄バンク推進連絡協議会顧問）、造血幹細胞移植におけるGVHDと感染症のクロストーク、豊嶋崇徳（九州大学病院遺伝子細胞療法部准教授）、3月3日、和歌山

Wakayama CML Meeting（ノバルティスファーマ社主催）：CMLの分子病態と新しい治療戦略、松村 到（近畿大学血液・膠原病内科教授）、4月27日、和歌山

第2回和歌山県DIC治療セミナー（旭化成ファーマ社主催）：様々な基礎疾患に合併したDICに対するrTMの使用経験、池添隆之（高知大学講師 血液・呼吸器内科）、6月22日、和歌山

CBT Meeting in 和歌山（大日本住友製薬主催）：東大医科研における成人臍帯血移植、大井 淳（東大医科研附属病院 血液腫瘍内科 講師）、9月6日、和歌山

骨髄腫フォーラム in 和歌山（藤本製薬主催）：多発性骨髄腫の診療、畑 裕之（熊本大学大学院生命科学研究部 医療技術学講座 准教授）、9月7日、和歌山

MDSフォーラム2012 in 大阪（日本新薬主催）：低リスクMDSに対するアザシチジン（ビダーザ）治療の実際（松田光弘、PL病院）、MDSに認められる遺伝子変異の臨床的意義について（冨田章裕、名古屋大学血液内科）、9月15日、大阪

ポテリジオ発売記念講演会in和歌山（協和発酵キリン社主催）：新時代のATL診療～ポテリジオで変わるATL診療、石田高司（名古屋市大 腫瘍・免疫内科講師）、9月29日、和歌山

第2回紀州血液塾（中外製薬共催）：白血病の病態解明と治療標的、黒川峰夫（東京大学教授）、10月12日、和歌山

和歌山Hematology Seminar 2012（ノバルティス社共催）：Amp-CML と国際基準法の相関と解釈に関する考察、中前博久、大阪市大 血液腫瘍制御学准教授；慢性骨髄性白血病のフロントライン治療in 2012、川口辰哉、熊本大学感染免疫診療部 准教授、10月26日、和歌山

Chugai Hematology Symposium（中外製薬共催）：多発性骨髄腫に対する新しい治療戦略、島崎千尋（社会保険京都病院副院長）、11月9日 和歌山

平成24年度大学院特別講義（和歌山県立医科大学）：細胞接着分子の異常と癌の進展、村上善則（東京大学医科学研究所教授）、11月16日、和歌山（同日、血液内科医局セミナーも、ATL、細胞接着分子CADM1の癌化における両面性）

## (9) 海外出張

該当なし。

## 診療実績

### (1) 患者数

#### 1) 入院

入院 患者総 (のべ) 数 (一時退院後を含む) 270 名

退院 患者総 (のべ) 数 (一時退院を含む) 280 名

#### 2) 外来

患者総 (のべ) 数 5,560 名

内新患者数 231 名

### (2) 入院患者疾病別分類 (入院のみ, 重複あり, 疑い症例を含む)

#### 1) 白血病 77

##### 急性骨髄性 (単球性等)

M0 (4)

M1 (3)

M2 (8)

M3 (10)

M4 (11)

M6 (4)

M7 (2)

急性リンパ性 (ALL) (25)

慢性リンパ性 (CLL, SLL, PLL) (4)

慢性骨髄性白血病 (CML) (6)

#### 2) 骨髄異形成症候群 (MDS) 21

#### 3) リンパ性腫瘍 121

非ホジキンリンパ腫 (111)

ホジキンリンパ腫 (3)

その他 (0)

成人 T 細胞白血病 / リンパ腫 (7)

#### 4) 形質細胞腫瘍 39

多発性骨髄腫 (37)

原発性マクログロブリン (2)

5)	血球減少症（造血不全含む）	11
	再生不良性貧血	(3)
	汎血球減少症	(0)
	血小板減少症（ITP 等）	(2)
	好中球減少症	(2)
	特発性血小板減少性紫斑病	(3)
	血球貪食症候群	(1)
6)	溶血疾患	0
	自己免疫性	(0)
7)	骨髄増殖性疾患	1
	特発性好酸球增多症候群	(1)
8)	感染症	2
	HIV 感染症（エイズなど）	(2)
9)	その他	18
	造血幹細胞移植ドナー入院	(14)
	リウマチ、敗血症	(1)
	キャッスルマン病	(1)
	後天性血友病	(1)
	全身性アミロイドーシス	(1)
(3)	造血幹細胞移植	
1)	自家移植	27
2)	血縁	6
3)	非血縁	12
(4)	死亡	16
(5)	剖検（率）	7（43.7%）

## リーダーレポート

准教授 園木 孝志

今年3月に田村志宣先生と島貫栄弥先生が当科を辞され、それぞれ、紀南病院と熊本県山鹿市民医療センターへと移られた。お二人にはお世話になり心から感謝している。4月には自治医大血液内科で研鑽をつままれてきた西川彰則先生が助教として当科に参加していただき、新宮医療センターからは蒸野寿紀先生が大学院生として帰ってきてくれた。お二人とも頼りがいがある。10月から12月にかけてマレーシアからDr. Jew WinKuan（官有云先生；中国系マレーシア人で、英語・中国語・マレー語を話すという）が当科診療の見学にこられた。彼女のバイタリティに南アジアの活気を感じた。11月には山東大学と本学とのシンポジウムで発表の機会を頂いた。小さいけれども温かいシンポジウムだったと思う。参加の機会を与えていただいた諸先生方に感謝している。12月には新しい医局へと様変わりし、私は中熊教授から一部屋をいただいた。あらためて当教室と本県医療の発展に力を注いでいこうと思っている。さて、いつものように今年一年の活動をまとめてみる。

（臨床）火曜日と金曜日の定期外来のほかに、月曜日と木曜日には外来化学療法を受ける患者さんを診察し、水曜日には海南市民病院で外来・入院治療を行っている。外来患者を診療するうえでバックベットの確保は重要だといつも感じている。本県における造血器疾患患者・担癌患者・免疫不全患者さんたちがどこでも安心して診療を受けることができる体制はどうあるべきかと考えている。今年も5西病棟・血液内科外来・外来化学療法センター・腫瘍センター・地域医療連携室・海南市民病院の皆様にとってもお世話になった。この場を借りて深謝申し上げます。

（研究）島貫先生の仕事を論文化した。Igλ転座の遺伝子単離にインバースPCRを応用した論文で、思いがけず難産であったが立派な原著論文に仕上がったと思う。この仕事は前々から温めていたプロジェクトであり私にとっても一区切りである。あとは綿貫先生と島貫先生の博士号取得の手続きを急ぎたい。大学院生の細井先生と栗山先生は診療の合間に論文を読み研究に取り掛かっている。診療から生まれた疑問をどんなに小さなことでもいいので自分で答えを出す臨床家になっていただきたい。

（教育）本年度から外来でのポリクリを月に2回担当することになった。大部分の学生は目を輝かして実習を行ってくれている。かつての自分は教官にどう映っていたらと思う。初期研修に当科を選択してくれた大岩健洋先生、小畑裕史先生、山下友佑先生、岩本高典先生、梅本秀俊先生、田中侑先生、森本将矢先生はいずれもモチベーションが高い若者であった。今後に期待したい。

振り返ればこの一年、「震災後一年」、「ロンドンオリンピック」、「山中教授のノーベル賞」、「師走選挙」が思いつく。周囲が変化していこうと、私に与えられた仕事を天命と思って粛々と努力していきたい。

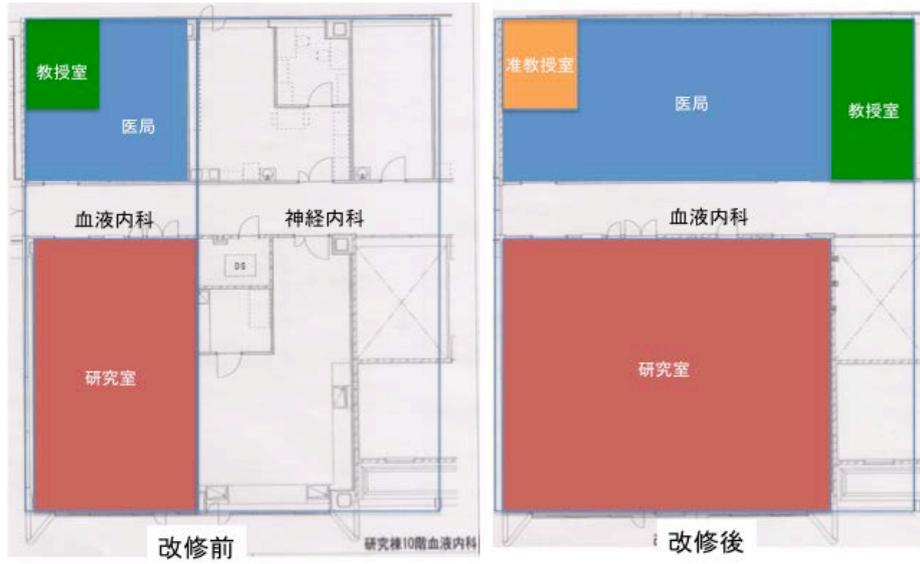
最近の暗い世相の中で、ノーベル生理学・医学賞に iPS 細胞（人工多能性幹細胞）の樹立に成功した京都大学の山中伸弥教授が選ばれたことは、我々日本人にとって元気の出る明るい話題でした。この iPS 技術は、我々の分野でも血液難病の病態解明や高い安全性と効果が求められる輸血や造血幹細胞移植の進展に貢献してくれるものと期待しています。

恒例により、今年一年の活動を振り返ります。

（外来）外来化学療法、輸血や点滴、骨髄検査などの処置件数が増加しました。この変化に対応できるように松井副看護師長に加え、専任看護師の塩崎さんと、11 月から専任外来クラーク嶋本さんが配置されました。予診室も通常の診察室機能を併せ持つように整備し直しました。また、今年から医局員 9 名全員で外来を担当していただきました。診察室 2 つ、予診室 1 つ、処置用ベッド 2 台をフル稼働しても、午前 10 時前後のゴールデンタイムには自分の診療スペースを探すのに苦労されたと思います。ご迷惑をおかけしました。来年度に向けて、診療環境の改善と患者サービスの向上につながるように運用システムの構築をはかりたいと思います。何はともあれ、今年も松井さん、塩崎さん、嶋本さんと、まとめ役である谷口外来師長さん達の協力もあり、事故なく円滑に診療が遂行できました。皆様の日頃のご支援に感謝いたしますとともに来年も引き続きよろしくお願い申し上げます。

（研究）医局と研究室の改築工事を行い、他科並みのスペースと設備を手にするようになりました。中熊教授や秘書の二人はもとより皆様の協力に感謝します。今年度は、研究生 3 名と大学院生 4 名が在籍しています。環境が整ったことにより、当然、今後はこれまで以上の成果と結果が求められると覚悟しています。今年もうれしい話題がいくつかありました。一つ目は、大学院を修了した栗本美和先生が当講座出身者で初の博士号取得者となりました。和歌山県立医科大学血液内科の新たな歴史の始まりです。この流れに続くように他の院生に対しても最大限支援をしていきたいと思っています。二つ目は、第 98 回近畿血液学会地方会において、初期研修医の小畑裕史先生が当科に初めての最優秀賞をもたらしてくれました。他の多くの研修医の皆さんも日常修練の合間に、まとめや発表練習など努力と協力をしてくれました。ありがとうございました。来年度以降仲間として集えるものと信じています。その他の成果としては、英文原著が 6 報受理され、研究費助成も 2 件獲得できました。学会発表も例年通り 20 演題近く採択されました。これまで先輩方が土を耕し（環境整備）種をまき（人材育成）、我慢して水やり草取り（実力を蓄積）をしてきたことが、徐々に芽が出てきて幹となり、我々がその実（成果）を収穫しつつあると感じています。この実を絶やすことなく、さらに多くのしっかりした成果を“和歌山から世界へ”来年度も継続して発信していきたいと考えています。引き続き皆様のご協力をお願い申し上げます。

（医局工事紹介）7 月に設計開始され、11 月 5 日から改修工事が始まりました。旧神経内科の教授室、医局、研究室を吸収合併し次頁のようになりました。これまで研究室、病院棟（Dr 室、カンファレンス室）に点在していた医局員も全て年内に完成した医局に移りました。



改修前



改修後



医局前廊下



医局掲示板

## 和歌山県立医大での4年間

病棟医長・助教 畑中 一生

私が赴任して早くも3年半が過ぎました。今年度は、田村先生、島貫先生が異動され、西川先生、蒸野先生が病棟メンバーに加わりました。

西川先生は自治医大での臨床経験を我々に伝えてくれました。どちらが良い悪いではなく、地域や医局の流儀の違いなどは大変興味深いものでした。人間的にも落ち着いた大人の雰囲気、病棟に安定感をもたらしてくれました。蒸野先生は間違いなく今年度の一番の成長株でしょう。6年目で初めて血液内科の専門研修を受け、多くの造血幹細胞移植も経験しました。最も多くの症例を担当しました。忙しくとも、研修医と同様に高いモチベーションを維持しつつ、目を輝かせて仕事をしていました。病棟の古株である同期の細井先生、村田先生、後輩の栗山先生などのサポートを受け、新しい知識や経験を吸収している姿に、周囲も良い刺激を受けました。新宮市立医療センターでの内科研修の経験により得た実力も存分に発揮してくれました。彼のムードメーカーとしての役割はチームに活気を与えてくれました。

研修医も昨年とは異なり、女医さんに縁がなく野郎ばかりでしたが、賑やかで非常に楽しい1年でした。血液内科のローテーションは忙しいという噂がたつ程、熱心で真面目に研修にも取り組んでくれました。

さて、私が赴任して病棟では約180件の造血幹細胞移植を行われました。2010年の件数は年間59件で、学長が目指している全国トップ10に入る第7位でした。国内でも有数の移植施設になりました。現在は、和歌山県下の患者さんの治療を県内で行うことが出来るようになってきていると確信しております。

しかし、4年間の私の残したものは、決して治療実績ではありません。一例一例は、主治医と患者さん、ご家族、病棟スタッフが一緒に悩んで治療を進めた積み重ねです。毎日のカンファレンスで、検査値異常、発熱や疼痛などについて細かく議論しました。難治症例では、移植時期や移植ソース、前処置の方法などについても議論しました。週末に急変して、ICUにお世話になることもありました。時には悲しい結果に終わり、病理解剖の承諾を得て施行しました。このような繰り返しの中で、一緒に悩み苦しみ、時には感動して、多くの知識や経験を病棟メンバーで共有できたことが、4年間で唯一の私が残せたものだと思います。多くの場面で、インフォームドコンセントの重要性、移植のタイミングや移植適応の限界、治療経過中の合併症の鑑別診断など、教科書には載っていない、曖昧ですがとても重要な事柄についてのニュアンスが伝わっていると期待しています。

論文として形に残せるような仕事ではありませんでしたが、一緒に経験したメンバーには、きっと何らかの作用はしていると信じています。次に入るメンバーに繋がる財産になって、今後の治療を受けられる多くの患者さんに貢献できると信じています。

和歌山県立医大での4年間で、私自身も少なからず成長できたと実感しています。来春には異動することとなりましたが、教授をはじめ、医局員の皆様には深く感謝を申し上げます。

4月に自治医大から赴任して早くも8ヶ月が過ぎました。近いうちに地元の和歌山に帰ろうと思っていた際に、蒸野先生からお誘いのメールを頂き、それならばと2011年の秋に中熊先生に面接をしていただき、直ぐに異動することを決めました。わずか1年前のことですが、結構前のことのように感じられ、この8ヶ月間は充実した日々を過ごしてきたのかなと実感しています。

人事というのは縁で、医師になる前はシステムエンジニアをしておりましたが、その会社に就職した決め手は、社訓の「Honesty」でした。最終面接の面接官からは、「会社としてはあなたを採用したいと思う。この時点で採用する側と応募する側は対等になった。是非うちの会社に決めて欲しいと思うが、どうするかは明日までに返事をして欲しい。それは定員もあることなので、返事を引き伸ばすことでその他の募集している学生にも迷惑がかかる。」この言葉を聞いて、この会社の公正で正直な姿勢に感銘を受けて就職を決めました。中熊先生との面接でも同様に「Honesty」の精神に通じる何かを感じ、この医局でやっていきたいという気持ちになりました。

4月に赴任して臨床中心にやってきましたが、畑中先生を中心に若い先生たちが、全力で患者さんたちの診療に取り組んでいる姿勢がよい雰囲気を生み出しており、忙しい中にも充実感が感じられ、自分ももっと頑張らねばという気持ちになりました。自治医大では、大きな医局ではありますが、どちらかという若手の先生たちが少ない環境にいたため、若い先生たちと切磋琢磨できることが新鮮で、また自分が経験したことのない難しい移植など教えてもらうことも多く、本当に和歌山に帰ってきてよかったなと感じています。

立場が人を作るという言葉があります。助教という立場を与えていただき、学生の授業なども担当することになりましたが、これまでと違う立場で戸惑ったりすることもありましたが、なんとか自分なりにその立場の責務を果たせるようにすることで、あとから見れば自分の成長を実感できるような、そんな1日1日を過ごすことができれば幸いと感じています。

これまで尽力して下さった畑中先生が今年度で異動されることになり、大変残念ですが、これまでの指導や経験を糧に全員野球の精神で乗り切っていくのが大切だと考えています。

私自身としては、新たなメンバーが加わってくれるような更に魅力的な医局を目指していく一助になれると幸いです。

輸血部は、病院の組織上‘輸血部’として独立していますが、専従スタッフ5名は中央検査部からの出向です。今年も4月の人事異動で2年間一緒に働いてきた杉山さんが中央検査部に戻り、中央検査部に新規採用された峯さんが輸血部に配属されました。最初に峯さんからひとこと。

はじめまして。ご紹介いただきました峯梓です。3月まで大阪の学校に通っていて、和医大に実習に来ていました。半年間の実習に来るまでは和医大にほとんど来たことがなく、病院についてあまり知らなかったのですが、実習に来たことで、和医大に就職したいという思いが大きくなりました。そして、就職試験を受け、無事に就職することができました。初めは、和医大に勤めるまで全く働いたことがなかったため、仕事についての不安がとても大きかったのですが、松浪さん始め輸血部の方々に指導していただき、今は基本的なルーチン業務ができるようになりました。しかし、まだまだ勉強不足で、少しでも例外があると一人では対応できないことがたくさんあり、輸血部の方々には助けていただければいいので、もっと輸血について勉強していかないといけないと思っています。ご迷惑をお掛けすることがあると思いますが、精一杯頑張っていきますので、宜しくお願いします。

今年の目標は ①輸血管料の取得

②輸血部スタッフの能力開発の継続と人材育成 でした。

①今年4月の診療報酬改定で、輸血管料の取得基準が「施設基準の適合」と「輸血製剤の適正使用」に分けられ取得しやすくなったにもかかわらず、和歌山医大は8公立大学病院で、唯一どちらも取得できていませんでした。輸血療法委員会で対策を協議し、輸血部全員で周知作業にあたりるとともに科長会でも院内へ周知することにより、来年2月からの算定が可能となりました。

②病院機能評価更新の年にあたるため、その対策として昨年からはじめた症例検討や手技統一は月1回程度なのですが継続中です。人材育成は、まだ形となって表れてくれませんが来年以降に期待したいと思います。

気がつけば、2012年も残りわずか。輸血業務で大きなインシデントはありませんでしたが、解決できていない課題（予算がないため）を残してしまい、さらに血液製剤の廃棄金額は努力の甲斐なく昨年より50万円程度増えてしまいそうです。今後も課題解決に努力したいと思いますので、血液内科の先生方・5西病棟の方々、来年もよろしくお祈りします。

## 5 階西病棟 看護師長 西口知子

私にとって 2012 年の最大の出来事は、5 階西病棟への異動でした。これまで私の看護師経験は、救命救急センターと外科系病棟がほとんどで、内科病棟の経験は 1 か所しかなく新たな分野への異動でした。そして、看護スタッフにも勤務を共にした人が一人もいないという病棟への異動は、不安でいっぱいでした。そんな不安な思いで 4 月がスタートしましたが、振り返ってみればあっという間に 8 か月が過ぎていました。

5 階西病棟に異動してまず、何とも言えないとても不思議な空間があり驚きました。そして、病棟での様子では、常に医師がナースステーション内にいるということが、これまでの経験ではあまりなかったことでした。看護師にとってはとても心強く、すぐに医師に報告ができる環境であり、チーム医療を行う上でもとてもよいことだと感じています。

チーム医療と言えば、今年は病院機能評価更新の年でした。まさか 5 階西のような特殊な病棟が審査病棟になるとは思ってもいなかったのですが、見事にあたってしまいました。ケアプロセス審査病棟と決定しても、先生方は無関心な様子にみえましたが、さすがに本審査前には、きちんと準備をして臨んでいらっしゃいました。環境的に問題もあり、どうなることかと思っておりましたが、みなさまのご協力のおかげで評価は思った以上によく、無事に審査を終えほっとしています。

さて、5 階西病棟での看護についてもふれておきたいと思います。血液内科と緩和ケア部門ということで、患者さんのほとんどが、がん患者さんで終末期患者さんも多くケアする看護師にとってはとてもストレスフルな環境です。平均在院日数 15 日という病院にあって 5 階西病棟は 24 日と長く、患者さんへの関わりはさすがに内科病棟と感じています。しかし、治療期間が長く、入退院を繰り返す患者さんへの看護は、心理的負荷がかかりやすい状況です。その上に、血液疾患患者さんについては急変も多く、急変時対応のスキルも要求される場所であるとも感じています。また、一方では、緩和ケア部門でもあるということで患者さんの看取りも多く経験します。このような病棟での看護は本当にストレスフルであると思いますが、スタッフ達は看護チームとしてお互いをサポートしながらよくがんばってくれています。さらに先生方も協力してチーム力を強化し、よりよいチーム医療を提供できるよう努力していきたいと思っています。

私にとっては新たな分野での経験で慣れるまでに随分時間がかかり、看護師長としての役割はなかなか果たせなかったと思いますが、みなさまに温かく見守っていただき何とか無事に本年を終えることができそうです。病棟運営にご協力をいただきましたみなさまに心より感謝し、リーダーレポートを終えたいと思います。ありがとうございました。来年もどうぞよろしくお願いいたします。

## 寄稿文

ご報告

独立行政法人労働者健康福祉機構  
和歌山ろうさい病院 血液内科 阪口 臨

2012年の報告をいたします。

まず、春に、当科栗本先生が、日本がん治療認定医機構のがん治療認定医を取得しました。これは、当院で第1号となりました。また、秋には、学位も取得しました。これらは、栗本先生自身の、普段からのたゆまぬ努力の成果であることは言うまでもありませんが、中熊先生はじめ貴医局の皆様などの御指導の賜物でもあります。ここに御礼申し上げます。

次に、秋に、化学療法センターが開設されました。これは、外来通院での抗ガン剤治療を、適切かつ安全に患者に提供することを目的として設立されました。当然、これまでも外来通院での治療は行ってきましたが、センター化することにより、各スタッフが今まで以上に責任を持って化学療法に関わることを目指しています。実は、前述の栗本先生の認定医取得を見越して、このセンターを実現化すべく、画策していました。幸いにも、外科や呼吸器内科などの協力を得ることができ、共同で運営を開始しています。また、看護部や薬剤部や中央検査部のコメディカルスタッフや医事課の事務スタッフもセンターの一員として参画しており、それぞれの専門性をいかんなく発揮してもらえよう環境整備もしています。残念ながら、貴院の腫瘍センターのように、専任・専従での対応は、まだできていませんが、各スタッフが兼務で当センターを支えてくれています。なお、当院は、前述の機構が認定する研修施設にもなりましたので、当センターは、研修医の先生方が、がん治療を肌で感じてもらう研修の受け皿として、その機能を研ぎ澄ませたいと思います。

また、3月と9月に、初期研修医のローテートを受け入れました。それぞれ1ヶ月間と短い期間でしたが、濃密で充実した研修だったと感じてくれていることを祈っています。

まだまだ至らぬ点がありますが、今後ともご鞭撻よろしく願いいたします。

血液内科に入局する際、中熊教授が私に3つの言葉をくださいました。

①「血液内科（輸血血液疾患治療部）として科が独立して、また私（中熊教授）が和歌山に赴任して、君（栗本）が初めての和医大出身の入局者になる。君が歩む道が後輩達の道になり、医局の未来をつくるのですよ。」

②「私は、君にどうしろとは言わない。道は自分でつくりなさい。そのサポートをするのが教授である私の役割である。」

③「10年後を見ていなさい。医局員が余るほど増えて困るようになっているはずだよ。それまでの辛抱だから頑張りなさい。」という言葉でした。

この言葉を聞いた時の正直な感想としては、「これは、エライことになった。そんなことできるのだろうか？」というものでした。周りの同級生達が、それぞれの医局で、先輩方が通った決められた道を特に疑問もなく進む中で、自分はまずどの方向を向いて進むかから自分で決めないといけないのですから。初期研修が終わったばかりのピヨピヨちゃんには『エライこと』です。

そこで、私なりにどうすればいいのか考えてみました。「まず、自分にしかできないことは、①の言葉だろう。将来入局する後輩達が歩ける道をつくること、これが医局における私の役割なのだろう。では、“後輩につなげる道”とは？ まずは、この医局で勉強し経験を積むことで、血液内科医として1人前になれるということかな。それを成果として誰にでもわかるようにする必要があるだろう。それには、具体的に内科認定医や血液専門医などの資格を取れるようにすること、臨床で忙しくても研究したい人は研究ができて学位も取れる環境が得られるようにすること。ここまでは、他の科に進んだ先生も皆が通る道だし、最低限必要な道だろう。そこまで道を作れば、後はそれぞれがそれまでの経験をふまえて独自の道を歩んでいけるだろう。」と当時の自分には壮大な計画を立てました。

これを実現するのは、他の歴史ある医局では普通に得られる道ですが、全てにおいて前例がない当科ではなかなか大変な道のりでした。ですが、根気良く私につきあってくださり、ご指導して下さった先生方（中熊教授、松岡先生、園木先生、花岡先生、小島先生、采田先生、畑中先生などの諸先生方）、看護師さんをはじめ病棟のスタッフの方々、いつもサポートして下さった秘書さん達、今の勤務地である和歌山労災病院の阪口部長をはじめスタッフの方々、皆さんのおかげでなんとか、専門医も学位も取得することができ、入局時に立てた『計画』を達成できました。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

そろそろ、教授の③の言葉にあった10年になります。医局員が余るほどには増えていませんが、村田先生、蒸野先生、細井先生、栗山先生と後輩の先生方が臨床に研究にと頑張ってくれています。10年でどんな道ができたのでしょうか。ちゃんと道になっているのでしょうか。自分では、この目標を達成するための過程が道になってくれればと必死に走り続けてきたのでよくわかりませんが、この優秀な後輩達が頑張ってくれていることが、『道』なのかなあと、その後輩の先生方の姿にととてもうれしく思います。

私が皆さんのご尽力の下につくった道は小さい砂利道程度かもしれませんが、ここからは、彼らがきっと素晴らしい『道』をつくっていってくれることを期待しています。

平成 24 年 4 月から田辺市の社会保険紀南病院に血液腫瘍内科を新設致しました。紀南地区の拠点病院では初の標榜であり、血液診療の拠点病院として重責を感じております。地域病院の先生方そして住民から熱望されていた領域であり、この 8 か月あまりの外来・入院の診療患者数を振り返ってみてもそれは明白です。入院患者数は 1 か月平均 24 名であり、今後も増加の一途を辿る勢いです (図 1)。特に、悪性リンパ腫の症例が多く、次いで多発性骨髄腫・急性骨髄性白血病の症例が多いです (図 2)。これは入院患者の平均年齢が 68.3 歳と高齢者が多いことが反映されていると考えております。

自家末梢血幹細胞移植については、おかげ様で軌道にのり、ルーチン業務として行っております。この 8 か月で幹細胞採取 7 回と自家移植 7 回施行しました。そして、和歌山県下で当院のみ投与可能である放射線免疫抗体療法 Zevalin®についても、症例数はトータルで 10 例を超えようとしており、2012 年 10 月からは Zevalin®による地固め療法の医師主導の臨床試験に参加中です。同種移植以外の治療であれば、都市部と同等程度の医療水準をこの地区で提供できることを目標にしております。

ただ、ここでひとつ疑問が・・・(病棟スタッフにもよく質問されることですが・・・)。昨年度まで、この患者様たちは、いったいどこで医療を受けていたのだろうか? どのような医療が提供されていたのであろうか? そんなことを考えると、たとえひとりであっても、もうひと踏ん張りする必要があると心に秘めながら、この瞬間も診療にあたっていきたいと思っております。

図 1

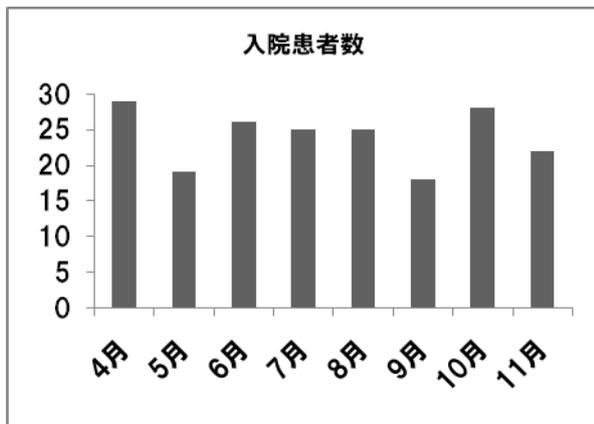


図 2

